

ポストB R I C s の一角として注目されるパキスタン

～ 農業生産の多寡に左右されにくい経済構造への転換が進む～

2006年5月22日(月)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

～ 要 旨 ～

E-mail: postbrics@yahoo.co.jp

ポストB R I C s の一角としてパキスタンの経済が注目されている。パキスタンは、隣国のインドと同様、経済活動に占める農業部門の割合が高く、基本的に農業生産の多寡に経済成長が左右されやすい構造となっている。製造業もこれまでは繊維産業が中心となっていたため、綿花の収穫高などの影響を受け易かった。1990年代は、主力の農業部門が全般的に振るわなかったため、低い経済成長率が続いたとみられる。

しかし、2001会計年度以降は、経済成長率が徐々に加速しており、2004会計年度は前年比+8.4%の高成長を記録した。農業生産が回復したことに加えて、農業以外の産業が徐々に育ってきたことが、近年の高成長につながっているとみられる。製造業においても、農業生産に左右される繊維セクターのほか、自動車など重厚長大型の産業が台頭しつつある。

ムシャラフ大統領が、金融や貿易の自由化といった各種の規制緩和を積極的に進めていることなどを背景に、海外からの投資も増加傾向にある。パキスタン中央銀行が発表している国際収支統計をみると、近年、パキスタンへの対内直接投資が急増していることが分かる。2005会計年度は、約30億ドルと前年実績(15.2億ドル)に比べて倍増するとみられる

マクロ経済の好調を反映して株式市場も好調だ。カラチ証券取引所の代表的な株価指数であるカラチ株価指数は、2002年から一貫して上昇傾向で推移しており、足元では12000近くの水準に達している。株式市場には、中東など海外で働くパキスタン人のマネーも相当程度流入している。

巨額に上る財政赤字が縮小してきたことも、パキスタン経済にとってはプラス材料だ。ムシャラフ大統領は財政再建を積極的に進めており、その結果、一時は10%近くに達していた財政赤字の名目GDP比は2004会計年度に3.0%まで縮小した。

短期的な景気の懸念材料はインフレーションの加速である。パキスタンはこれまで高成長を続けてきたため、足元の景気が過熱気味となっており、デマンドプル型のインフレ懸念が生じている。また最近の原油の国際価格上昇も、物価に対する上昇圧力として働き始めている。インフレが顕在化すれば、金融引き締め政策の強化によって、パキスタンの景気が冷え込む可能性があることには十分な注意が必要だろう。